2025年5月11日　説教「イエスにさわった理由」

ルカの福音書8章40～48節

ガリラヤ湖東岸のゲラサの地において、悪霊につかれた男が解放された出来事について、前回は学びました。その地の人々の要請もあって、イエスの一行は西岸に戻りました。

１．会堂管理者ヤイロの娘（40～42）

①喜んで迎えた群衆（40）**「さて、イエスが帰られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたからである。」**

湖の西側の地、おそらくはカペナウムに帰ると、待ちわびていた人々はイエスの一行の帰還を歓迎します。そうした人々のなかには、イエスの教えを聞きたいという思う人々とともに、病気をいやしてもらいたいと願う人々も少なからずいました。

②会堂管理者ヤイロ（41）**「するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。」**

そこにヤイロという名前の人がやって来ました。彼は会堂管理者でありました。ユダヤ教の会堂（シナゴーグ）の管理者でした。建物の管理ばかりではなく、礼拝プログラムなどを整える役割もしていました。ですから、イエスの許には来難い立場でした。しかし、彼は必死でした。イエスの前に額づいて、なんとしても自分の家に来てもらいたいと述べるのでした。なりふり構わないという様子です。

③ヤイロの娘（42）**「彼には十二歳ぐらいのひとりの娘たいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。」**

というのも、ヤイロには12歳ぐらいの娘がいたのです。現在の日本でいえば六年生か中学一年生です。その子が死にかけているというのです。なんとか癒していただきたいという要請を受けて、イエスはヤイロの家に向かい始められました。群衆たちのなかには、様々な必要をかかえる人々がいましたが、イエスは意を決してヤイロの娘を選ばれたのです。

２．癒された女（43～45）

①長血を患った女（43）**「ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、」**

会堂管理者ヤイロの娘の所に向かう途上で出来事がありました。それは一人の女性に関わることでした。彼女は12年もの間、長血をわずらっていました。婦人特有の出血が長期にわたる病気でした。マルコの福音書5章によると、多くの医者にかかっても直しもらえず、ひどいめに会わされ、医療費を支払うことで自分の持ち物を使い果たしましたが、病気はかえって悪くなる一方だったのです。参照；レビ15:25以下。

②着物にふさにさわって（44）**「イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。」**

彼女は群衆でごったがえすなか、イエスに近づきました。そしてイエスのふさにさわったのです。ふさは当初、一枚の服地の四隅にあるより糸の束でした。しかし、イエスの時代には、布の端の全体にこのふさがついていたようです。彼女は服の端のふさに触れると、たちどころに長年の問題であった長血が止まりました。

③イエスにさわったのは誰か（45）**「イエスは、『わたしにさわったのは、だれですか。』と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、『先生、この大ぜいの人が、ひしめき合って押しているのです』と言った。」**

その時にイエスは言われたのです。「わたしにさわったのは誰ですか」。服のふさに触れたのですから、普通なら体にその感覚に伝わることはないはずです。それに大勢の人がいるのですから、ペテロの言うこともっともでした。『先生。こんな大勢の人がひしめきあって、押し合いへし合いしているのですから、そんなことを言われても、特定するのは無理があります。』

３．信仰を認められた女（**46～48 節**）

①力が出ていくのを感じ（46）**「しかし、イエスは、『だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから』と言われた。」**

しかし、イエスは肉体が感ずるものとは異なる、特別の感覚をお持ちでした。それゆえに、言われたのです。「誰かが私に触りましたか。なぜなら、私の内から力が出ていくのを感じたのです」。これは、誰かを咎めようとして言われたのではなく、事実を主はそのまま言われたのです。また、そのことで恵みというものを教えようとされたのです。

②震えながら進み出て（47）**「女は、隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第とを話した。」**

一方、その女性は緊張していました。主イエスが自分のことを言っておられるということはよくわかりました。もはや隠し切れないと思いました。そこで、勇気を奮い、震えつつ、イエスの御前にひれ伏しました。そして、群衆の前で自分がどうしてイエスに触れたのかを伝えました。マルコの福音書を見ると、彼女は「お着物にふれることができれば、きっと直ると考えていた」と記されています。そして、実際にその直後にその病気は癒されたことを証ししたのです。

③あなたの信仰が直した（48）**「そこで、イエスは彼女に言われた。『娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。』」**

この一連の出来事のあとに、イエスは彼女に言われました。『娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです』。イエスの御力によって癒されたのですが、イエスは女が主を信じる信仰があったからこそ、癒されたのだと言ってくださましたそして、これからの彼女の人生を祝福するかのように、『安心して行きなさい』と励ましてくださったのです。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。

第一は、イエス・キリストのご配慮についてです

今朝の聖書箇所は 40～42 節が会堂管理者ヤイロの娘の話、43～48 節が長血の女の話が記されています。そして、この後の 49 節から 56 節まではヤイロの娘の話の続きが記されています。真ん中の話をはさむようにして、一つの出来事が二つに分かれているというのは新約聖書では、この出来事だけです。この二つの出来事は密接不可分なのです。イエスは、ヤイロの娘と長血の女に同様な深いご配慮をもっておられました。ヤイロから要請を受けて、イエスはその家に向かおうと急がれました。ところが、途中で長血の女と出会って、その女と関わって時間を使っておられます。12 歳の女の子は急がないと死んでしまうかもしれないのに、主は目の前の女性にも十分なご配慮をなさっています。ここに、イエス・キリストの私たち一人一人へのご配慮を読み取ることができます。まさに「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）なのです。

第二に、長血の女がイエスの着物のふさに触った理由についてです。

彼女は、盲人バルテマイが「ダビデの子イエス様。私を憐れんでください。」と叫んだように（マルコ 10:47）アピールをしたわけではありません。天井からつり降ろされた中風の男のように、友人たちの信仰によって癒された（ルカ 5 章）わけでもありません。彼女はイエス様に声をかけることもできず、イエスさまの服のふさに触れればこの病は癒されると信じてそうしたのです。その結果、彼女の病は癒されたのです。そして、彼女の確信に基づく行動を「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです」と言っていただいたのです。ここで、主が「誰かが私にさわったのか」と言われた時に、彼女は公衆の面前で、勇気を出して、イエスの前に出たことが大切です。彼女は、ひれ伏して、イエスの服のふさに触った理由を語りました。ここに彼女の信仰が認められたのです。私たちも、何か心に咎めや誰にも言えない求めがある時に、主の前に出て祈りましょう。そしてありのままをお伝えしましょう。

第三に、癒された女の信仰の現代への適用です。

私たちがこの長血を患っていた女から学べることは何でしょうか。彼女はイエスのふさにさわればいやされると信じて、それを実行しました。今日、病気を癒していただきたいという時、私たちは祈りつつ、病院に行き、医師を通して検査や診察を受け、治療を受けるでしょう。そこに主は働いて、癒しのわざをあらわしてくださいます。ただ、私たちの信仰に基づいて、手をおいて祈る時に、癒しのわざがなされる可能性があることも否定できません。病院に関わるにしても、何にしても、癒しの業は、神によってのみなされることを信じていきましょう。また、教会の病を覚える時に、私たちはこの女のごとく、イエスが教会の病を良くしてくださると信じて、踏み出したように、ともに祈りつつ、導かれたことを行っていきましょう。そこに、主は働いて下さいます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）